

元会長、名誉会員

大崎順彦博士の御逝去を悼む

大崎順彦博士には、1999年8月25日午前5時42分に膵臓癌のため東京都港区の虎ノ門共済病院で逝去されました。1921年5月10日のお生まれで享年78歳でした。

博士は1943年9月に東京帝国大学工学部航空学科をご卒業後直ちに当時の帝国海軍横須賀航空技術廠に奉職し航空機の研究に専念しておられました。1945年の終戦によって、故郷の島根県に戻り晴耕雨読の生活をしていましたが、その才能を高く評価した建設省建築研究所が博士を招聘し、1946年5月から建築研究所において建築構造の研究を始められました。

航空学科で力学と数学を熱心に勉強されていたので基本的な学力がしっかりと身に付いており、これに加えて非常に頭脳明晰であり、研究においては常に全力投球をされておられました。このようなことから後述する多くの分野で立派な業績を挙げることが出来たのだと思っております。博士は最初に鉄筋コンクリートの研究に取り組みましたが、建築の分野で地盤・基礎構造の研究が遅れている事を知ると、直ちにノースウエスタン大学に留学し1952年に大学院修士課程を終了しました。帰国後は国立国会図書館の地盤調査に従事し土質力学に基づく建築基礎構造の設計を日本で初めて行い、また地域の地盤特性を全体として把握することが重要であるとして、共同研究で「東京地盤図」を作成しました。これらの研究で、「基礎・地盤ならびに上部構造との関連に関する研究」で1957年に建築学会賞、「東京地盤図」で1959年にも同じく建築学会賞を受賞されております。

土質工学会（現在の地盤工学会）では1956年から59年度に理事として、1967年から68年度には副会長に就任し、1963年の第2回アジア地域会議では実行委員会の幹事長を務め、1962年から65年まで土質工学会で鋼グイ研究委員会の幹事として目覚ましい活躍をされております。特に鋼グイの研究では当時の学会の年間予算の約40%に相当する受託研究費を鋼材倶楽部から導入し、当時としては珍しかった産学共同研究を遂行され、土質工学会の財政と研究活動に非常に貢献をされました。鋼グイの腐食に関して約20年間にわたる実測を行い、1982年に土質工学会賞を受賞されております。これは実に地味な研究であり貴重な資料を長期間の実測により求めたもので、他人の研究成果を鵜呑みにしないで自分が納得するまで真摯に追求する厳しい姿勢の成果でもあります。

その後は研究の主力分野を地盤・基礎工学から耐震工学へと移行されました。最初は地盤の震害調査から始まり、特に1964年の新潟地震の被害調査では、飽和砂質地盤の液状化を現地調査で徹底的に解明し、その後の液状化研究に大きな影響を与えております。また原子力発電所の耐震設計、地震動のスペクトル（大崎スペクトル）と耐震工学の分野で顕著な業績をあげられ、「1年に10パーセントずつ研究の内容を変えれば、10年すれば研究内容を全く一新出来る」の持論は、大崎博士の緻密な頭脳と研究熱心がそれを如実に示したのであります。

官（建築研究所第三研究部長、国際地震工学部長）、学（東京大学名誉教授）、産（清水建設代表取締役副社長）と全く異なった分野で立派に役割を果たされ、また研究の分野では建築学会大賞、建築学会賞、土質工学会賞、土質工学会功労賞、原子力安全功労者賞と多くの賞を受賞し、「建築基礎構造」、「地震動のスペクトル解析入門」を初め多数の著書を刊行され、地盤工学会と建築学会の名誉会員に推挙されております。

大崎博士は『和』を尊重し多数の人をまとめて仕事を進めていく優れた指導者でもありましたが、研究の面では非常に厳しく、兄事し御指導をいただいた45年間を通じ常に「他人の真似をするな」、「真の独創的な研究とは No reference である」が口癖であり、耳にタコが出来た程聞かされました。

昨年の5月に「七十七歳になったのでパーティーを開催し親しくしている人達を御招待したい」との御手紙をいただき、会に出席しました。会場でお会いすると非常に痩せておられ、今にして思えば、聡明な方なので御自分の病気を知り、それを皆に悟らせないで明るく振舞っていたのではないかと感無量であります。御遺族は美枝子夫人とお二人のご子息とご令嬢の4人です。

心から大崎博士のご冥福をお祈り申し上げます。

（岸田英明 東京工業大学名誉教授・東京理科大学教授）

社団法人 地盤工学会

